

編 集 後 記

まがりなりにも、診断は行きつくところまで行ったものである。可視的診断の限界をきわめたことになった。各執筆者が、めいめい苦勞のあとをそのままに示して教えてくれている。これらをお手本にして、明日からの診療に生かそうと私も決意している。今まで不慣れだった点を補い、新しいことをつけ加えることができる軌道を、われわれは見出したのである。

微小という呼称も、1 cm で何が微小か、という異議もおこる。他に適当な名前があればよいのだが、まだ、そのままになっている。そのうちに話も固まるであろう。微小なもの、それに (and)、小さいもの、この両者を含めたという意味でしかない。大きさにも差のある病変の集まりを指すこんな意味あいだから、訳語にはさぞ困られたことであろう。本誌の文中をひろってみても、組織切片写真の説明で microcarcinoma (丸山) と記されているものの、表題や文中に使われているのは、minute cancer, minute lesion (高木), microcarcinoma (西沢ほか), less than 1 cm in diameter, very small carcinoma, minute cancer, small change (福富ほか), smaller than 1 cm, minute lesion, minute early gastric cancer (鈴木ほか) などである。ご参考までに。

技術解説や診断の手ほどきを担当された方々は、明日にでも、それを外人に教える用意をしていただきたいものである。増田正典教授が過日の国際癌学会に出席されたあとのお話では、来年になったら、早期癌やその発見法を各国に教育する日本の役目は、それはそれは大変なことになりそうである。

アンケートで皆さんの貴重な成績と声をいただくことができた。これは日本の宝でもあり、「胃と腸」誌の Patent でもある。

<白 壁 彦 夫>